賀茂別雷神社の役大工と儀式における祝儀について

YAKU-DAIKU AND PRESENTS AFTER CEREMONIES AT KAMOWAKEIKAZUCHI SHRINE

中西大輔*, 日向 進**

Daisuke NAKANISHI and Susumu HYUGA

This paper discusses how more presents the Yaku-daiku were given after a ceremony. The Yaku-daiku were carpenters working at Kamowakeikazuchi Shrine. They were divided into two groups, and broken down into three levels. The highest level was Daiku, followed by Toryo, and Cho. Their presents showed the following three points:

1. They were given presents based on their position.
2. Carpenters in the main group were given more presents than those in the assistant group.
3. They were also given what they had used during a ceremony.

These differences were related to both their ceremonial procedures and their position.

Keywords: Kamowakeikazuchi Shrine, Carpenter, Ceremony, Reconstruction, Presents given to carpenters after a ceremony

賀茂別雷神社, 建築工匠, 儀式, 造営, 祝儀

1. はじめに

江戸時代の賀茂別雷神社では、役大工と呼ばれる建築工匠たちが建物の新造・修理を行っていた。この役大工は正・権の2グループに分かれ、それぞれが大工・棟梁・長という階層組織をもっていた。役大工は9人であり、内訳は正大工1人、権大工1人、正棟梁1人、権棟梁1人、正長3人、権長2人である^{注1)}。本稿では必要に応じて長を儀式における役割の順に正長a、正長b、正長c、権長a、権長bとして区別することにする。

これまでに、役大工は江戸時代の賀茂別雷神社で造営に携わってきたことが知られている^{注2)}。江戸時代の造営は幕府によるものであり、寛永・延宝・正徳・寛保・安永・享和・天保・文久の8度実施されている。造営に参加する諸職人は入札によって選ばれたが、本殿など一部の建物における新造には、入札ではなく、きまって役大工が選ばれてきた。

この役大工に関して、儀式の内容という面から検討したことがある^{注3)}。その結果、上棟については正徳度までの本殿上棟は、正大工・正棟梁・正長（以下、正大工のグループ）だけが執り行い、寛保度以降も正大工のグループが主導的な役割を担っていた。これに対して、正徳度までの権殿上棟は、権大工のグループだけが行ない、寛保度以降も権大工のグループが主導的な役割を担っていたことがわ

かった。また木造始めでも、延宝度以前には役大工が地位の順番に作法を行なうという形式であったものが、正徳度以降には正大工のグループと権大工のグループが順番に作法をするという形式に改められていたことがわかった。同様に立柱・玉橋渡始めでも少なくとも寛保度以降、正大工のグループと権大工のグループが順番に作法を行なうという形式がとられていたことがわかった。

本稿では、江戸時代に役大工が執り行った儀式について、儀式後に渡された祝儀という面から検討する。地位と役割、祝儀の関係をみることで役大工の地位について考えたい。なお、本稿では祝儀を①反物や折紙、米による禄と、②儀式に用いられた道具、③儀式のために供えられた供物、にわけて考える。

扱う儀式は木造始め、立柱、上棟、玉橋渡始めであり、前回と同様である。本稿でいう木造始めは造営において最初の段階で行なわれるものを指すこととする。木造始めは鉦始めとも呼ばれ、事実寛永度の造営などでは「鉦始」とされているが、これも木造始めとして統一する。立柱・上棟は本殿と権殿で行なわれたもののみを扱う。寛永度を除いて摂社・末社は修理のみであり、これらの儀式が行なわれていないためである。玉橋渡始めとは玉橋の修理が完了したときに行なわれる儀式のことである。なお、玉橋は本殿・権殿を画する区域の入口である楼門の前にある。

* 京都工芸繊維大学大学院 大学院生

** 京都工芸繊維大学工学科学研究科 教授・工博

Graduate Student, Kyoto Institute of Technology
Prof., Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng.

以上4つの儀式について、造営に関して賀茂別雷神社で作成された日記（以下、本文中では『造営日記』）を調査した^{注4)}。ただし、寛永度・延宝度には『造営日記』が残っていない。そのため、寛永度には『寛永造替遷宮記 上』（Ⅲ-23-1）、『寛永造営遷宮記』（Ⅳ-A-43）と題される後世の写本（これも本文中では『造営日記』とする）を用い^{注5)}、延宝度には『造営日記』と同様、賀茂別雷神社で作成された日次記（以下『日次記』）を用いることにする^{注6)}。

2. 祝儀

2.1. 木造始め

木造始めにおける役大工の祝儀は大工と棟梁・長の間で差がつけられている（表1）。寛永度の詳細は不明であるが、延宝度には正大工・権大工が小袖の折紙をもらい、棟梁・長は絹の折紙をもらっている。小袖は「大正初期ごろまで絹布の綿入の着物」のことを指し、木綿の綿入とは区別されていたというから^{注8)}、大工が小袖の完成品の折紙をもらったのに対して棟梁・長はその材料の折紙をもらったといえる^{注9)}。正徳度になると棟梁・長のもらうものは絹で変わりが、大工は金襴巻物の裂をもらっている。ともに反物ではあるが、金襴は絹より手が込んでいる。寛保度には大工が絹1反をもらい、棟梁・長は素目録をもらっている。安永度・享和度には具体的な記述がない。しかし、天保度・文久度には大工が絹、棟梁・長が絹1疋の折紙をもらっていることから寛保度と近い形式とみることができ、安永度・享和度にも同種の形式が用いられていた可能性が高い。

これは禄をもらう場所と方法に関係があると考えられる。『造営日記』の小袖や反物をもらう場面は次のように記されている^{注10)}。

表1 木造始めの祝儀^{注7)}

	職名	正大工のグループ		権大工のグループ	
		禄（被物）	禄（代米）	禄（被物）	禄（代米）
寛永度	大工	御服	記述なし	小袖	記述なし
	棟梁	不明	記述なし	不明	記述なし
	長	不明	記述なし	不明	記述なし
延宝度	大工	小袖1つの折紙	記述なし	小袖1つの折紙	記述なし
	棟梁	絹1疋の折紙	記述なし	絹1疋の折紙	記述なし
	長	絹1疋の折紙	記述なし	絹1疋の折紙	記述なし
正徳度	大工	金襴巻物の裂8尺	米3斗	金襴巻物の裂8尺	米3斗
	棟梁	絹1疋	米2斗	絹1疋	米2斗
	長	絹1疋	米2斗	絹1疋	米2斗
寛保度	大工	絹1反	禄代米3斗	絹1反	禄代米3斗
	棟梁	素目録	禄代米2斗	素目録	禄代米2斗
	長	素目録	禄代米2斗	素目録	禄代米2斗
安永度	大工	不明	米3斗	不明	米3斗
	棟梁	不明	米2斗	不明	米2斗
	長	不明	米2斗	不明	米2斗
享和度	大工	不明	米3斗	不明	米3斗
	棟梁	不明	米2斗	不明	米2斗
	長	不明	米2斗	不明	米2斗
天保度	大工	生絹1反	米3斗	生絹1反	米3斗
	棟梁	絹1疋の折紙	米2斗	絹1疋の折紙	米2斗
	長	絹1疋の折紙	米2斗	絹1疋の折紙	米2斗
文久度	大工	絹	3斗	絹	3斗
	棟梁	絹1疋の折紙	2斗	絹1疋の折紙	2斗
	長	絹1疋の折紙	2斗	絹1疋の折紙	2斗

表記・単位は史料通り

次賜禄於正大工

其儀別当大夫自直会所持出、氏神祢宜ニ渡、氏神祢宜唐戸より出、請取之、於唐戸前、賜正大工^{左ノ肩ニ打掛}、正大工拝受、向唐戸、祠官へ御礼、蹲踞而退キ、東ニ而作所ニ向ニ蹲踞、了而退ク、次権大工ニ給、其義正大工ニ同シ、但氏神祝より被渡之（略）

別当大夫・作所奉行并番匠以下着庁屋、於此所棟梁以下に禄ヲ給^{別当・作所役之}、且神供直相^{（会）}

正大工と権大工が儀式直後に禄をもらうのに対して、棟梁・長は庁屋に場所を移してから禄をもらう。大工は人前で肩に掛けられるという形で禄を受けるため、現物でなければならなかったと考えることができる^{注11)}。さらに正大工は氏神祢宜より禄を渡されるのに対して、権大工は氏神祢宜より1つ位の低い氏神祝より禄を渡されるという点でも差がつけられている。

また少なくとも正徳度以降、禄は後で米に交換されることになっている^{注12)}。後で交換される米は大工が3斗で棟梁・長が2斗と一定である。最初にもらう禄が変わろうとも、交換される米の量は一定であり、最初の禄は形式だけであったことがわかる。なお延宝度には、近々木作始執行候、急々ノ義候間、先当日之次第・作法相談可有之とて則此度之銀子ノ割ヲ以随分質略ノ筋ヲ以書記候（略）大工・諸職人へも装束・被物等一向ニ停止候

とあり^{注13)}、実質的な禄がなかったようである。また通常ならば装束も儀式で着たものをもらっていたようである。

ここで木造始めの作法を思い出してみると、正徳度を境に大きく異なっていた^{注14)}。もともと寛永度・延宝度には役大工が順番に鉾を打っていた。それが正徳度以降には正大工と権大工だけが鉾打ちをするものとなっていた。

以上のように、作法が変化したのに対して祝儀は実質的に変化しなかった。木造始めでは少なくとも延宝度以降、祝儀は大工と棟梁・長の間で形式が異なっていた^{注15)}。寛永度・延宝度に役大工全員が順に鉾を打っていたこととは異なる傾向といえる。同様に、正徳度以降棟梁が墨を打ち、大工が鉾を打ち、長はそれぞれの補助を担当していたことを考えると、棟梁と長の祝儀に差がつけられず、作法の内容とは対応していないといえる。祝儀の形式・量は作法の内容よりむしろ役大工の地位によるものと考えることができる。ただし、儀式終盤において大工だけが禄をもらい、棟梁・長は儀式後に別の場所で禄をもらうという儀式的執り行われ方とは一致している。そのため、役大工が受ける祝儀の厚薄は、より広義には儀式の内容と対応しているともいえる。

2.2. 立柱

立柱における役大工の祝儀は、地位によって差がつけられている（表2）。寛永度に行なわれた本殿立柱の事例しかみつからず、検討するには不十分であるが、大工と棟梁を比べると大工のほうが棟梁よりも樽、鯛の量が多く、するめが加えられ、品目自体が多くなって

表2 寛永度の本殿立柱における祝儀^{注16)}

職名	正大工のグループ	権大工のグループ
大工	樽3つ、鯛3枚、昆布1束、するめ1連	樽3つ、鯛3枚、昆布1束、するめ1連
棟梁	樽1つ、鯛2枚、昆布1束	樽1つ、鯛2枚、昆布1束
長	なし ^{注1)}	なし ^{注1)}

注1) ただし、「惣大工中」へ樽2つ、昆布1束、するめ8連

表記・単位は史料通り

いる。また長に渡される祝儀はなく、「惣大工中」として渡されている。長だけでも5人いたことを考えると、大工と棟梁に比べて非常に少なかったことがわかる。

ここで木造始めと同様に立柱の作法を思い出してみると、少なくとも正徳度以降、正大工のグループ、権大工のグループがそれぞれ同じ作法を行っていた^{注17)}。寛永度・延宝度のことはわからないが、正徳度以降、長から棟梁、棟梁から大工へ供物が渡され供えられている。また長から棟梁へ供物が渡され供えられている。

以上のように、立柱では少なくとも寛永度には大工、棟梁、長と地位によって祝儀に厚薄があった。延宝度以降の儀式における役大工の作法を寛永度の儀式にもあてはまるものとして祝儀の厚薄と比べると、大工は供物を供えるだけであり、棟梁は供物を供える以外に大工へ供物を渡すという補助的な役割を担い、長は大工と棟梁の供物を運ぶだけというまったく補助的な役割に当たっていた。このことと祝儀の厚薄は対応しているといえ、ひいては役大工の地位とも対応しているといえる。

2.3. 上棟

上棟における役大工の祝儀は役大工の地位によって差がつけられている（次ページ表3）。

正徳度までの本殿上棟では正大工のグループのみが祝儀を受け、権大工のグループは祝儀を受けていないのに対して、権殿上棟では正大工のグループは祝儀を受けず、権大工のグループのみが祝儀を受けている。寛永度本殿上棟においては、大工と棟梁の祝儀は比較的似ていて、大工と棟梁の間には掛銭の違いと、大工が奉幣と弓矢をもらっているのに対して棟梁は幣と槌をもらっているという違いがあるだけである。長はとくに供物の種類が少ない。道具についても一見すると幣と槌を3本ずつもらい棟梁よりも多いようにみえるが、長が3人いることを考えると棟梁と変わらない。ただし、長だけがもらっているものに「柱巻」と「膝突布」がある。寛永度の権殿上棟では、このような配分は示されず、酒樽かなにかを大工、棟梁、長がそれぞれひとりあたり10荷、5荷、2.5荷もらっている。これは地位の順によって2倍の量を受けとっていることになる。

役大工の祝儀配分について次のような規定がある。延宝度造営の場合について、当時の『日次記』には^{注19)}、

去寛永之度もヶ様ノ申分出入等有之云々、惣メ旧記等之躰、御弓矢・御幣・諸神供等支配ノ義ハ何も半分ツヽニ割、壺ツ分ヲ大工、相残壺ツ分ヲ又ツツニ配、其壺ツ分ヲ棟梁、又相残分ヲ長棟梁当分ニ支配申云々、縦令御幣四棒内式棒ハ大工、残式棒之内一棒ハ棟梁、一棒ハ長棟梁、縦雖為何人、可支配之旨所見事、然者此度権大工申分御弓矢張頂戴之、御矢ノ分ヲ棟梁ヘ可遣候との事、今少如何此義ハ御弓矢一対ツヽ可然歟、且又権棟梁御幣一棒大工ヘ配分仕事、非沙汰之限歟、御棟ノ幣一棒・振幣一棒以上式棒大工ヘ可渡之者也、勿論自余可準之

とある。このことと大工・棟梁・長の人数比から弓矢・幣・供物の配分は、
正大工：正棟梁：正長＝6：3：1

権大工：権棟梁：権長＝4：2：1

ということになる^{注20)}。また、権大工は棟の幣1本と「振幣」1本を受け取ることが賀茂別雷神社によって決定している。延宝度本殿上棟でも、幣はそれぞれ1本ずつもらっているが、正大工はさらに「振幣」をもらっている。

ただし、掛銭はこのような比率で配分されていないことが多い。寛永度および正徳度の本殿上棟の掛銭では、棟梁と長の間にも差がつけられている。しかし、延宝度のような整数倍にはなっていない。また、安永度以降は主導する側の大工・棟梁と主導する側の長・補助する側の大工・棟梁・長の間で2.5倍の差がつけられるようになっている。配分に関する別の決まりがつくられたものと思われる。ただし、関係する記事はみつからない。

弓矢の配分は確定されていないようであるが、その後本殿上棟で起こった同様の問題から弓矢のこともわかる。『日次記』には^{注21)}、

元大工ヘハ御弓弍張ニ而も可有之、然ヲ去寛永之度相互ニ申分仕、御弓一張ツヽ支配仕

とあり、賀茂別雷神社としては寛永度の配分が異例のことであって、本来大工が弓2張をもらっていたことを認めている^{注22)}。そして安永度以降の祝儀をみると大工が弓2挺、棟梁が矢2本と絃2筋1疋をもらっていることから、権大工の言い分が通ったことがわかる^{注23)}。

また、禄は大工が多く受けている。延宝度・正徳度・寛保度の事例をみると、大工の祝儀は呉服1重と馬1疋、棟梁・長は呉服1つと馬1疋の折紙を受けている。延宝度権殿上棟の少し前の『日次記』^{注24)}には権大工の祝儀は小袖2つと馬1疋、権棟梁・権長の祝儀は小袖1つと馬1疋となっていることから、呉服は小袖のことであり、呉服1重は呉服2つのことであったことがわかる。

寛保度以降の本殿上棟は正大工のグループも権大工のグループもともに祝儀を受けている。寛保度には延宝度本殿上棟でいう「給禄折紙」のみしか記されていないが、権大工のグループにも渡されるようになっている。安永度・享和度は同様の内容であり、大工と棟梁のもらう分も掛銭をふくめば同様であるが、大工のみがもらっているものとして弓・声綱・奉幣があり、棟梁のみがもらっているものとして絃と矢がある。長3人も均一ではなくなっている。長aと長bは同様であるが、長cは比較的少なくなっている。大工・棟梁とくらべて、樽や鯛などといった供物の種類もへり、数もへっている。長だけがもらっているものとして槌と充木がある。一方、権大工のグループが受ける祝儀は正大工のグループが受ける祝儀と比べて格段に少ないが、神酒は権大工のグループだけがもらっている。

寛保度以降の権殿上棟における祝儀は記されていない。天保度の権殿上棟には「供物頂戴之割、右割方享和ニ委し」などとあり、先例によっていたことがわかる。ただし、享和度の祝儀が不明であり、具体的なことはわからない。

安永度の権殿上棟における祝儀について権棟梁からの願書が記されているので、この願書を検討しておくことにする。この願書は全体を朱で抹消してあるため、実際に行なわれたものではないと思われる。内容をみても延宝度などに起こった訴訟と同様、権大工への配分と権棟梁への配分が安永度本殿上棟などと比べて異なっている。ただし、「充木」や「薦布」など本殿上棟で渡されている道具が記されていない。これは本殿上棟に再び使用するために分配されず残しておかれたのかもしれない^{注25)}。

ここでこれまでと同様に上棟の作法を思い出してみると、寛保度を境に大きく変化していた^{注26)}。寛永度・延宝度には本殿上棟は正大工のグループだけで行なわれ、権殿上棟は権大工のグループだけで行なわれていた。それが正徳度の本殿上棟に権長が、権殿上棟に正長が加わるようになるという段階を経て、寛保度以降になると、本

殿上棟は、正大工のグループが主導するものの、権大工のグループと共同で執り行うという形をとり、権殿上棟では権大工のグループが主導するものの、正大工のグループと共同で執り行うという形をとっていた。

以上のように、寛保度に作法が変化したのと同様、祝儀についても変化がみられた。上棟では地位によって祝儀に厚薄があるだけでなく、一方のグループだけが祝儀をもらう場合と他方のグループよりも祝儀が多い場合があった。寛永度から正徳度までは本殿上棟では正大工のグループだけが地位の順に多く祝儀をもらい、権殿上

棟では権大工のグループだけが地位の順に多く祝儀をもらっていた。寛保度以降は、本殿上棟において権大工のグループも祝儀をもらっていた。寛保度は禄以外の祝儀が不明であるが、安永度・享和度・天保度の本殿上棟では正大工のグループのほうが祝儀が多く、同一グループ内で比べると地位の順で祝儀に厚薄があった。また、大工だけがもらう祝儀、棟梁だけがもらう祝儀、長だけがもらう祝儀があった。寛保度以降本殿上棟に権大工のグループが祝儀をもらうことと、延宝度と安永度以降に特定の役職にあるものが特定の道具をもらうということは、儀式の作法と密接に関係しているといえる。

表 3 上棟の祝儀^{注18)}

		職名	正大工のグループ			権大工のグループ	
			禄	道具	供物	禄	道具
寛永度	本殿	大工	記述なし	弓矢・絃とも1張、奉幣1本、鉾子1枝、膝突布、御四目半分	樽15荷、鯛30枚、鰯30連、昆布30束、餅1荷、次米1荷、掛銭30貫 ^{注1}	記述なし ^{注2}	
		棟梁	記述なし	弓矢・絃とも1張、幣1本、鉾子1枝、榎1つ、膝突布、御注連半分	樽15荷、鯛30枚、鰯30連、昆布30束、餅1前、次米1前、掛銭15貫 ^{注1}	記述なし ^{注2}	
		長	記述なし	榎3つ、幣3本、柱巻・膝突布、	樽15荷、鯛20枚、鰯20連、昆布20束、掛銭10貫 ^{注1}	記述なし ^{注2}	
	権殿	大工	なし				
		棟梁	なし				
		長	なし				
延宝度	本殿	大工	給禄折紙	^{注4} 棟の幣1棒、振幣1棒	掛銭9匁 ^{注5}	なし	
		棟梁	給禄折紙	^{注4} 幣1棒	掛銭4.5匁 ^{注5}	なし	
		長	給禄折紙	幣1棒	掛銭4.5匁 ^{注5}	なし	
	権殿	大工	なし			呉服1重、馬1疋	棟の幣1棒、
正徳度	本殿	大工	呉服1重、馬1疋	^{注6}	掛銭500文	記述なし	
		棟梁	呉服1つ、馬1疋	^{注6}	掛銭324文	記述なし	
		長	呉服1つ、馬1疋		掛銭300文	記述なし	
	権殿	大工	記述なし			呉服1重、馬1疋	
寛保度	本殿	大工	呉服1重、馬1疋			呉服1重、馬1疋	
		棟梁	呉服1重、馬1疋			呉服1重、馬1疋	
		長	呉服1重、馬1疋			呉服1重、馬1疋	
	権殿	大工	記述なし			呉服1重、馬1疋	
安永度	本殿 ^{注8}	大工	記述なし	弓2挺、奉幣1棒、色幣1棒、台3、薦布1、声綱1疋	樽2つ、鯛2枚、鰯2連、昆布2把、餅1、次米1、掛銭500文	記述なし	
		棟梁	記述なし	絃2筋1疋、矢2本、色幣1棒、台3つ、薦布1	樽2、鯛2枚、鰯2連、昆布2把、餅1、次米1、掛銭500文	記述なし	榎1、
		長a ^{注7}	記述なし	榎1、充木1、色幣1棒、台2つ、薦布1	樽1、鯛1、鰯1連、昆布1把、掛銭200文	記述なし	榎1、
		長b	記述なし	榎1、充木1、色幣1棒、台2つ、薦布1	樽1、鯛1、鰯1連、昆布1把、掛銭200文	記述なし	台1、
		長c ^{注9}	記述なし	台1	餅1、銭200文	-	
	権殿 ^{注10}	大工	記述なし	机1脚	次米、干肴、掛銭200文	記述なし	棟幣1本、
		棟梁	記述なし	幣1本	次米、干肴、掛銭200文	記述なし	棟幣1本、
		長a	記述なし	棟榎1、棟幣1、	次米、干肴、掛銭200文、鰯、昆布、掛銭200文	記述なし	柱本幣1本、
		長b	記述なし		掛銭200文	記述なし	台1つ
		長c	記述なし		掛銭200文	-	柱本幣1本、
							台1つ

注1 正棟梁の言い分では正大工・正棟梁・正長ともに15貫

注2 惣大工へ5貫

注3 「武荷かたゝゝツゝ長棟梁式人」（合計30荷）

注4 弓矢は没収

注6 弓矢は権大工たちと同様に

注7 権長aとしたのは「同人」（正長b）とあるが

注8 享和度は安永度と同じ

注9 「加長」とあり、権大工・権棟梁・「加長」とつづく

ただし、棟で神酒を供えるのは正棟梁であったが、もらうのは権棟梁であった。

2.4. 玉橋渡始め

玉橋渡始めにおける役大工の祝儀には地位の違いによって差がつけられている（次ページ表4）。寛保度には平樽と昆布にのみ違いがあり、大工は奉幣を、棟梁は槌と鳴らし木を、長は飾幣をそれぞれ独占的にもらっている。安永度・享和度・天保度・文久度は祝儀の内容は全く同じで、寛保度とは少し異なっている。昆布は同じ量になり、干鰯は大工だけが多くなっている。さらに掛銭は寛保度には

	供物
	10荷 5荷 2.5荷 ^{注3}
振幣1棒、弓矢1対 弓矢1対	
充木1、 薦布1	玉女神酒1式、 棟神酒1式、 樽1、餅1、 次米1、鯛1連、昆布1把、 餅1、掛銭200文 餅1、 銭200文
薦布1 充木1、 薦布1	銭200文 鯛1連、昆布1把、 掛銭200文
-	-
奉幣1本、弓矢1対	樽3、鯛3枚、鯛2連、昆布2把、 餅1前、次米1前、掛銭500文
棟槌1つ、弓矢1対	樽3、鯛3枚、鯛2連、昆布2把、 餅1前、次米1前、掛銭500文
柱本槌1つ、	樽1つ、鯛1枚、鯛1連、昆布、 餅1つ、掛銭200文
柱本槌1つ、	樽1つ、鯛1枚、鯛1連、昆布、 餅1つ、掛銭200文
-	-

注5 正徳度の記事より。ただし、日付けは権殿の日付。長は3人分
表記・単位は史料通り

大工と棟梁で同じだけ受けとっていたが、安永度以降8文だけ大工のほうが多くなり^{注28)}、差がつけられるようになった。また長の掛銭は安永度以降、寛保度よりも20文上がっている。

ここでやはりこれまでと同様に玉橋渡始めの作法を思い出してみると、正大工のグループと権大工のグループが順に作法を執り行っていた^{注29)}。まず、長、正棟梁を経て渡された幣を正大工が振り、それに合わせて長から渡された槌を正棟梁が打つ。つづいて長、権棟梁を経て渡された幣を権大工が振り、それに合わせて長から渡された槌を権棟梁が打つ。この儀式は寛保度と安永度以降で槌を打つ場所が橋の両詰から東詰のみになったが、作法自体に変化はなかった。

以上のように、寛保度以降、作法がほぼ変化しなかったのと同様に、祝儀もほぼ変化しなかった。玉橋渡始めでは役大工の地位によって祝儀にわずかながら差がつけられている一方で、正大工のグループと権大工のグループには差がつけられていない。このことは寛保度と安永度以降で細かい違いがあるものの基本的には同様である。また幣など役職特有の祝儀は儀式で担当した役割で使用したものであった。これらのことから玉橋渡始めの祝儀は、儀式の作法が寛保度以降わずかな変更しかくわえられなかったことと一致し、作法内容とも一致するといえる。

3. おわりに

本稿では江戸時代に賀茂別雷神社で行なわれた幕府による造営において執り行われた儀式における役大工の祝儀を検討した。

祝儀の違いは、大工・棟梁・長という地位によると考えられた。とくに上棟では延宝度に地位による分配方法が決められている。安永度以降になると、別の方法が決められたようである。儀式を主導する側の大工と棟梁の祝儀は差がほぼなくなるが、長と儀式を補助する側の大工・棟梁はより少ない祝儀であった。また、木造始めでは江戸時代を通して棟梁と長の祝儀が等しかったのに対して、大工の祝儀だけが多かった。同様に、玉橋渡始めでも安永度にわずかであるが大工の祝儀が棟梁より多く設定されている。これらのことは大工、棟梁、長がという分類が儀式における役割分担以上のものであったことを示しているといえる。また棟梁の祝儀は、大工の祝儀に近い儀式と長の祝儀に近い儀式があった。このことは長から派生したであろう棟梁について考えていくうえで参考になると思われる。

さらに、祝儀の違いは儀式における役割の違いにもよっていると考えることができた。上棟・玉橋渡始めでは儀式で使う道具が実際にその道具を儀式のなかで使った建築工匠に渡されている。また寛保度以降の上棟でみられた主導するグループと補助するグループに大きな違いは、正徳度以前の上棟や、正大工・権大工の各グループと本殿・権殿の組み合わせと対応しているといえる。

注

注1) 中西大輔・日向進「賀茂別雷神社役大工と大徳寺」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）』2009年8月、同「賀茂別雷神社役大工の編成」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』2011年8月
注2) 谷直樹・植松清志・大上直樹「近世における上賀茂神社の造営と大工について」『平成18年度日本建築学会近畿支部研究報告集』2006年5月、谷直樹「遷宮と造替」大山喬平監修、石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編『上賀茂のもり・やしろ・まつり』思文閣出版、2006年6月、前掲注1「賀茂別雷神社役大工と大徳寺」
注3) 中西大輔・日向進「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」『日本建築学会計画系論文集』第77巻第671号、2012年1月

表 4 玉橋渡始めの祝儀^{注 27)}

	職名	正大工のグループ		権大工のグループ	
		道具	供物	道具	供物
寛保度	大工棟梁長 ^{注1}	奉幣1本、 槌1本、 ならし木1本 飾弊1本、	平樽1つ、干鰯1枚、昆布2把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭80文	奉幣1本、 槌1本、 ならし木1本 飾弊1本、	平樽1つ、干鰯1枚、昆布2把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭80文
	安永度	大工棟梁長 ^{注1}	奉幣1棒、 槌1、 ならし木1 色幣1棒、	奉幣1棒、 槌1、 ならし木1 色幣1棒、	平樽1、 干鰯2枚、昆布1把、銭128文 干鰯1枚、昆布1把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭100文
享和度	大工棟梁長 ^{注1}	奉幣1棒、 槌1、 鳴し木1 色幣1棒、	平樽1、 干鰯2、 昆布1把、銭128文 干鰯1枚、昆布1把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭100文	奉幣1棒、 槌1、 鳴し木1 色幣1棒、	平樽1、 干鰯2、 昆布1把、銭128文 干鰯1枚、昆布1把、銭120文 干鰯1枚、昆布1把、銭100文
	文久度	大工棟梁長 ^{注1}	奉幣1棒、 槌1、 ならし木1 色幣1棒、	奉幣1棒、 槌1、 ならし木1 色幣1棒、	平樽1、 干鰯2枚、昆布1把、銭128文 干鰯1枚、昆布1把、銭120文 干鰯1枚、昆布1枚、銭100文

注1 1人ずつ

表記・単位は史料通り

注 4) 『賀茂別雷神社文書』(賀茂別雷神社蔵)

注 5) 『賀茂別雷神社文書』(賀茂別雷神社蔵)。() 内の数字は『賀茂別雷神社文書目録』(京都府教育委員会、2003 年) と対応する。以下でとくに断らない限り、『賀茂別雷神社文書』を引用している。

注 6) 『賀茂別雷神社文書』(賀茂別雷神社蔵)。必要に応じて延宝度以外の造営でも参照する。なお、本稿で用いた『日次記』は東京大学史料編纂所による。

注 7) 寛永度については『寛永造替遷宮記 上』(Ⅲ -23-1)、『寛永造営遷宮記』(Ⅳ -A-43) 寛永 4 年 (1627) 10 月 1 日条。延宝度については『日次記』延宝 7 年 (1679) 1 月 27 日条。正徳度については『造営日記』(Ⅲ -21-2) 宝永 7 年 (1710) 12 月 23 日条、『日次記』同日条。寛保度については『寛保御造営抜書 全 (従元文五年十二月八日)』(Ⅲ -23-4) 寛保元年 (1741) 1 月 23 日条、『寛保遷宮私記 (自元文六年正月至寛保元年十二月)』(Ⅲ -23-6) 同日条。安永度については『御造営雑記』(Ⅲ -21-21) 安永 6 年 (1777) 2 月 4 日条。享和度については『御造営日記 (自五月一日至十五日)』(Ⅲ -23-17) 享和元年 (1801) 5 月 14 日条、同 15 日条。天保度については『三御造営日記』(Ⅲ -22-13) 天保 5 年 (1834) 9 月 9 日条、同 11 日条。文久度については『御造営仮日記七』(Ⅲ -22-25) 文久 3 年 (1863) 5 月 27 日条。

注 8) 河簀実英『日本服飾史辞典』東京堂出版、昭和 44 年

注 9) 新村出『広辞苑 第六版』(岩波書店、2008 年 1 月) によれば、「疋」は 1 疋で布帛 2 反をあらわし、「反」は成人 1 人前の衣料に相当する量をあらわすという。したがって、材料としては棟梁・長のほうが多くなってしまう。しかし少なくとも後述のように、大工と棟梁・長とは祝儀をもらう場所と方法が異なる。そのため、大工の小袖「1 つ」はその方法によっている。

注 10) 引用は『御造営雑記』(Ⅲ -21-21) 安永 6 年 2 月 4 日条より。延宝度から文久度の木造始めにおいても類似の記述がある。

注 11) 『日次記』延宝 7 年 1 月 27 日条には、儀式のなかで「今日為祝義折紙ヲ正・権大工兩人下給候<sup>先年ハ興服一ツ充
今日形ハカリ</sup>」と記され、折紙だけが渡されている。

注 12) 『日次記』宝永 7 年 12 月 23 日条には「寛永ニハ被物小袖給之、延宝ニハ形ハカリノ折帛也、此度ハ如此後料物ニ引替可被下之評也」とある。文久度造営などには「下行」として記されている。

注 13) 『日次記』延宝 7 年 1 月 20 日条。先の延宝 7 年 1 月 20 日条からもわかる。寛保度にも、『寛保御造営抜書 全 (従元文五年十二月八日)』(Ⅲ -23-4) 寛保元年 1 月 23 日条に、「禄之事、延宝ハ素目録、正徳ハ正・権大工江金襴八尺宛、正棟梁以下江折帛・絹疋ツ、(略)」とある。

注 14) 前掲注 3「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」。正徳度については『日次記』の次第を参照した。

注 15) なお、『寛永造替遷宮記 上』(Ⅲ -23-1)、『寛永造営遷宮記』(Ⅳ -A-43) 寛永 4 年 (1627) 10 月 1 日条によれば、儀式後、庁屋で催される「無飯饗」においても大工と棟梁・長との間でつぎのような差がつけられている。大工には「三ツ杯」がつくが、棟梁・長にはつかない。また大工・棟梁には神社の役人から酒が注がれている。

注 16) 『寛永造替遷宮記 上』(Ⅲ -23-1)、『寛永造営遷宮記』(Ⅳ -A-43) 寛永 5 年 8 月 22 日条

注 17) 前掲注 3「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」

注 18) 寛永度については『寛永造替遷宮記 上』(Ⅲ -23-1)、『寛永造営遷宮記』(Ⅳ -A-43) 寛永 5 年 3 月 26 日条、『日次記』正徳元年 12 月 7 日条。延宝度については『日次記』延宝 7 年 6 月 2 日条、同 6 日条、同 8 月 7 日条、正徳

元年 12 月 7 日条。正徳度については『宝永八年辛卯御造営日記』(Ⅲ -21-3) 正徳元年 6 月 23 日条、『日次記』正徳元年 6 月 23 日条、同年 12 月 7 日条、『正徳元年辛卯年御造営日記』(Ⅲ -21-4) 正徳元年 9 月 5 日条、『日次記』同 9 月 5 日条、同 12 月 7 日条。寛保度については『寛保御造営抜書 全 (従元文五年十二月八日)』(Ⅲ -23-4) 寛保元年 8 月 21 日条。安永度については『御造営雑記』(Ⅲ -21-25) 安永 6 年 6 月 27 日条。享和度については『十四御造営日記』(Ⅲ -22-7) 享和元年 10 月 24 日条。安永度権殿上棟の願書については『御造営日記』(Ⅲ -21-23) 安永 6 年 4 月 24 日条。

なお、安永度・享和度には、このほかに「声掛」、「隨身」、「幣取次」、「正大工詰合」という役を務める建築工匠たちに祝儀が渡されている。配分は次のとおり。声掛「樽 1、鰯 1、昆布 1、掛銭 150 文、餅 1、染米 1、台 1、薦布 1」、隨身「鯛 1、染米 1、掛銭 150 文、台 1、薦布 1」、幣取次「銭 100 文」、正大工詰合「銭 50 文」。

注 19) 延宝 7 年 6 月 6 日条。これは権大工と権棟梁の間で配分について訴訟が起こったことによる。引用部分前半には、権大工と権棟梁が「双方共ニ旧記□ 伝来之旨申上」ていることが書かれている。それによると、権棟梁の「指図」による配分に対して「前々より其法式有之」、「少分之義雖有之候、前々よりノ法、末代迄之義候間、右之通、相渡申様ニ被仰渡可被下候」として権大工が訴訟を起したのである。なお、権大工は「御弓矢・御張ノ内、御弓木式本、御幣三本并奉幣一本以上四本之内、奉幣と御棟之幣一本と二本」を受け取るはずとしたのに対し、権棟梁は「御弓・御張之内一張分、権大工、御幣以上四本之内沓棒、権大工、其外樽・肴諸事支配ノ躰、前々よりノ法ニ候」とした。注 20) この方法は供物の配分にも使われているという。延宝度から寛保度までは、ほかの供物をもらったことは書かれていない。寛永度、安永度以降にも供物をもらっていることから考えてもらっていたと思われる。しかし、配分の比率を確認することはできない。

注 21) 『日次記』延宝 7 年 8 月 7 日条

注 22) ただし延宝度には、本来弓矢ももらうはずであったが、賀茂別雷神社に没収されている。これは『日次記』正徳元年 12 月 7 日条によれば、延宝度の上棟で正大工と正棟梁が弓矢配分のことでもめたことによる。なお正徳度には、弓矢の配分も権大工のグループと同様とある。そのため、権大工の祝儀には弓矢などが省略されているだけとわかる。そのため、やはり書かれていない供物もあり、省略されていただけとみることができる。

注 23) ただし後述するように、安永度にも権棟梁から同様の願書が賀茂別雷神社に提出されているが、却下されているようである。

注 24) 『日次記』延宝 7 年 5 月 27 日条

注 25) 「声綱」も記されていないが、これは本殿のみにあるものである(前掲注 3「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」)。

注 26) 前掲注 3「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」

注 27) 寛保度については『寛保御造営抜書 全 (従元文五年十二月八日)』(Ⅲ -23-4) 4 月 25 日条。安永度については『御造営日記』(Ⅲ -21-23) 安永 6 年 4 月 9 日条。享和度については『十五御造営日記』(Ⅲ -22-8) 享和元年 11 月 7 日条。文久度については『御造営仮日記十三』(Ⅲ -22-32) 文久 3 年 12 月 20 日条。

注 28) 安永度の祝儀配分については 120 文の上から「八」が書加えられている。

注 29) 前掲注 3「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」

(2011年11月10日原稿受理、2012年1月11日採用決定)